2010年1月31日 北海道新聞 朝刊全道版 掲載

低炭素社会形成に向かうトップランナーたち

～企業活動を通じたエコへの取り組み～

鳩山首相が温室効果ガスの25％削減を国際公約し、1月には新たな地球温暖化防止に向けた国民運動「チャレンジ25キャンペーン」がスタートする中、北海道でもエコビジネスに力を入れる企業が増えています。今回は、道内で先進的に活動している企業や協同組合の方々にお集まりいただき、低炭素社会の実現に向けた取り組みや今後のビジョンなどについて語りあっていただきました。 challeng25.go.jp

チャレンジ25

座談会

〈出席者〉
ウインド・カー株式会社
代表取締役社長 須賀原 信広氏
株式会社ソーラーネクスト
代表取締役社長 秋 寿文氏
とかちペレット協同組合
代表理事 中島 正博氏
〈聞き手〉
財団法人北海道環境財団
理事長 辻井 達一氏

低炭素社会に向けた道内企業のチャレンジ

辻井 最初にお三方の取り組みについてお聞きしましょう。では秋さんから。

秋 太陽熱を利用した暖房装置を製品化しています。建物の外壁に設置した集熱パネルに、室内から空気を送り込んで、太陽熱で暖めた空気を部屋に循環させて暖房する「ソーラーパンチ」という製品です。

辻井 ソーラーというと太陽光発電というイメージがありますが、壁面パネルでいこうと思ったのは？

秋 北海道では、雪が降ると屋根のソーラーパネルが使えません。また、冬の太陽は低いので、屋根よりも壁のほうが効率が良いと考えました。実験の段階でも雪の照り返しがあり、かなり効率が良かったんです。

辻井 なるほど。続いて須賀原さんお願いします。

須賀原 弊社のカーシェアリングは、会員同士が車を共有するという仕組みのビジネスです。15分2000円という基本料金がありまして、走行距離に応じて料金が加算されます。現在、札幌市内で約400人の会員がいて、30台の車が稼働中です。なんとか今年中には100台に増やして、2000人くらいの会員に使ってもらえるようにしたいと思っています。

辻井 わかりました。それでは中島さん。

中島 2004(平成16)年の12月に立ち上げた「とかちペレット協同組合」で、木質ペレットを生産しています。ペレットとは、森林の林地残材などを圧縮・成型した固形燃料で、循環利用できるバイオマスエネルギーの代表的なものです。うちの組合では、年間で約700トンのペレットを製造しています。

やりたいと思った事業が結果的にエコビジネスだった

辻井 皆さんがその事業を始めたきっかけは？

須賀原 私の本業は自動車の販売や整備ですが、年間2000キロ程度しか乗らないというお客さんも多いんです。そういう方が維持費をかけて車を所有するというのは、効率が良くないんじゃないかと。日本の一般的なユーザーが自動車を使う時間は、平均すると1日に20分といわれています。

辻井 そんなに少ないんですか。

須賀原 残りの23時間40分は動いていないわけです。ですから単純に考えると、1台の車を1日に36人で使うことができる。そういう発想です。

秋 寿文氏

秋 私の発想は、なんとか太陽の熱を暖房に生かせないかというシンプルなものです。やはり北海道で1番エネルギーを使うのは暖房ですから。あとは、前職が石油会社勤務だったので、石油を掘るためにかかるコストが上がり続けているのも気になっていました。自然エネルギーや、足寄のペレットのように、その地域に合ったエネルギー源を生み出す必要があると。

中島 正直な話、環境のためを思って始めた事業ではありません。とにかく、どんな形でもいいから新しい事業を興して、足寄の町を盛り上げていきたい。その気持ちだけでしたね。みんなで何か面白いことはできないか、そんな仲間が集まって始めた事業なので、実際にやってみると大変なこともありますが、楽しみながら頑張っています。ペレットを生産する工場は、ほぼ100％の稼働をしていて、おかげさまで年々販売量も順調に伸びています。

辻井 皆さん、事業そのものを楽しんでいらっしゃる。これが大事なんですよ。環境というと、どうしてもまじめな硬い話になってしまいがちですが、まず自分たちが楽しまないと。

秋 私どもの製品も、決して安いものではないんですが、購入してくれた方が「おもちゃを買ったみたいだ」と言ってくださったことがありまして。お客さまが楽しんでくださるのはうれしいですね。

須賀原 私も同じようなことを感じています。「ウインド・カー」の車は全国で60台あって、会員はすべての車のオーナーというわけです。ベンツのような高級車もあれば、キャンピングカーや軽トラックあるいは身障者車両まで、みんなでシェアできるウインド・カーを目指します。

中島 それは楽しいですね。ペレットストーブも、炎が見える心地よさや輻射熱の暖かさがいい、という声をよく聞きます。

辻井 炎を見ているだけで癒やされますよね。

中島 ペレットも、足寄のように森林資源が圧倒的に豊富な土地では、それなりに意味がありますが、どこでもペレットストーブがいいのか、というと一概には言えません。日本の林業がどちらの方向を目指すのか、それに大きく左右される部分もありますから。

辻井 それは環境の問題ですね。これからは、環境をいかにビジネス化していくかという発想が重要になってくると思います。

須賀原 私の場合は環境というよりも、車を効率よく、楽しく使うためにはどうしたらいいか、それがすべてでして。たとえば皆さん、ご自分の車に乗っていて、1時間当たりいくらかかるか分かりますか？

秋 いや、見当も付きません。

エコロジーとビジネスを楽しむという発想が大切

秋 カーシェアリングというシステム自体が環境にいいんですね。

辻井 それぞれのビジネスで何か困るようなことはありますか？

秋 先ほどお話ししたように、余裕を持って楽しんでくださるお客さまも多いんですが、これは何年で元が取れるのか、というようなお金の話も避けて通れませんね。どうしてもエコ商品イコール節約、というイメージがあって。消費者の心理としても仕方のないことだとは思うのですが。

中島 ペレット事業に興味があるという方が工場の視察にいらっしゃいますが、すぐに採算が取れるのかとか、もうかるのかだとか、大体そんな話になるので、それは無理ですとはっきり申し上げます(笑)。

須賀原 当社の調べでは、年間走行距離5400キロというのが、日本人の平均だそうです。そうすると、当社でシミュレーションした結果、1時間で3500円という計算になります。

中島 そんなこと、誰も考えていないですよね。

須賀原 それが、1時間で800円というようにコストを認識しますから、本当に必要な時だけ使うようになるんです。

中島 正博氏

事業を継続させることが低炭素社会へとつながる

須賀原 うちにもよく訪ねてきますね。どれくらいもうかるんだ、いつもうかるんだと、そんな話をされてもこっちは全然楽しくないので、早々にお引き取りいただくようにしていますが(笑)。

辻井 そういう方からは面会料をちょうだいしてはいかがでしょう(笑)。さて、そろそろまとめに入ろうと思います。皆さんの今後の展望についてお聞かせください。

秋 今、力を入れているのはレンタルハウスです。工事現場などで使うユニットハウスに設置できるパネルを、今年中に製品化するのが目標です。弊社のパネルはメンテナンスが簡単ですから、レンタルでの需要もあると思っています。いろいろなアイデアを取り入れながら製品を進化させていきたいですね。

須賀原 札幌市で、公用車として導入した電気自動車をカーシェアリングするという実験がスタートしました。西区役所にステーションを設けて、公用車として使わない土日祝日を市民と共同で利用するというものです。この取り組みを市内全域に広げていきたいですね。

中島 日本は樹木が多様なので、地域によってペレットの原料となる木が違います。すると、ペレット自体の品質も異なりますから、ストーブやボイラーとの相性の問題が出てくる。ペレットをもっと普及させるためにも、それをクリアしていかなければ、というのが業界全体としての大きな課題ですね。

辻井 事業は継続させることに価値があります。低炭素社会の実現のためにも、ぜひ楽しみながら頑張っていただきたいですね。今日はどうもありがとうございました。

辻井 達一氏

株式会社ソーラーネクスト

集熱パネルの大きさは約90×180cm。建物の外観や窓枠の色とマッチするバリエーションも用意されている

ウインド・カー株式会社

札幌市西区役所の電気自動車公用車カーシェアリングステーション。順調に稼働しており、市民からも好評

須賀原 信広氏

とかちペレット協同組合

とかちペレット協同組合には、現在は19社が参加。エコロジーとペレットをかけた「エコット」が商品名だ

エコビジネスを楽しむトップランナーへの期待

辻井 達一

お三方のお話をほぼ1時間、大層、面白く伺った。実は経営哲学のこむずかしい理論でも出てくるのではないか、と考えていたが。

まず、ほぼ共通するのは、地元の条件を生かして、あるいはその環境に合わせて発想していらっしゃることだ。たとえば秋さんはまず、北海道はやはり暖房が1番重要な課題で、それには経費が掛かる。という点を出発点としている。中島さんは、何とか足寄町を活性化させたい、というまさに地元志向だ。

第二は面白がる、あるいは面白がらせる、ということで、須賀屋さんは、一人では持てないいろいろな車が使える。ということを、秋さんは、壁面パネルは玩具を買ったような気がする、というクライアントが居るというお話を紹介なさった。

第三は、見方を変えてみる、という点だろう。考え直してみる、と言っても良い。車でいえば誰も時間当たりの経費など計算してはいまい。低炭素社会へ向けて考えてみなければならない課題なのだが。

秋さんの壁面ソーラーパネルは、そもそも屋根は雪が積もって効率が悪い、というところからのアイデアで、それ自体、「見方を変えて」出てきたものだ。すると、もっと太陽が低いところを動く高緯度地域、つまりもっと北へ、あるいはもっと南へ行けばさらに効率はいいことになるだろう。北欧でも、サハリンやシベリアでも有効だろう。南極あたりで試してみてはどうだろうか。

中島さんの木質ペレットを燃料とするストーブは、炎が見えるのがいい、といわれるそうだ。英国でセントラル・ヒーティングを時にはわざわざ切って、暖炉にまきをくべる、ということを聞いたが、今や、それはかなりのぜいたくに属する。省エネをしながら、そして地元の木材をとことんまで無駄なく使い、さらに楽しむことができればいうことはあるまい。トップランナーたちこそが、楽しんで事業を進めているのではないか。

企画制作／北海道新聞社広告局 特別協力／チャレンジ25キャンペーン（環境省）